

女性と貧困

『自分だけの部屋』と『三ギニー』から読み解くヴァージニア・ウルフの階級意識

梅田杏奈

はじめに

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) は、ふたつのエッセイ『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929) と『三ギニー』(*Three Guineas*, 1938) で、女性が男性による精神的かつ経済的な支配から脱却し、社会に参入する必要があると訴えている。そして、男女が異なるからこそ助け合えるのだと男女の違いを明確にしていく。男性優位な社会への反抗とも取れるこの主張は、女性の地位向上やフェミニズムの主張、平和主義の表れとして捉えられてきた。しかし、本論ではウルフがエッセイで繰り返し行っている男女の線引きに加え、女性が貧困と結びつけられている点に注目し、男女の差が貧富の差にすり替えられていることを提示する。

このエッセイにおいて貧困という言葉は、女性の立場の弱さを表現するための比喩として使われているに過ぎない。本当の貧困問題から焦点をずらし、男性を批判する手段として功を奏しているが、本当に貧しい人間については掘り下げもせず、協力を仰ぐ価値すらないと一蹴するのである。戦争は男性の責任であり、平和を守れるのは「わたしたち」だとする主張には、ウルフの上層中産階級の女性のひとりとしての誇りを見出し得るが、そこには無視された人間がいることから、「わたしたち」という表現に見られる閉鎖的な連帯感を明らかにする。

『自分だけの部屋』に書かれる女性の貧しさ

『自分だけの部屋』は、出版の前年である 1928 年にニューナム・カレッジ (Newnham College) とガートン・カレッジ (Girton College) で、実際にウルフが行った講演に基づいて書かれたエッセイである。このエッセイは、男性に比べて女性が貧困であることへの疑問から発している。まず比較されるのは、男性もいる昼食会での食事と、女子学寮の夕食である。前者ではワインを傾け語らうが、後者では堅い食べ物を水で飲み込むことしかできない。男女の差は貧富の差であり、口にするものから違っているのだという。女性は貧しいからこそ創作する余裕がなく、作家になるという選択肢も持てない。女性作家が男性に比べて少ない理由も、この貧しさが原因だとしている。

ここで貧困という言葉が指すのは、本当の意味での貧しさではない。あくまでも中産階級以上の「わたしたち」女性には、自分の名義で自由に使えるお金がないこと、経済力がないことを強調する比喩にすぎない。確かに、当時のイギリス社会では、結婚や相続によって男性に巨額の富が分配されていた。女性は個人の財産を持つことが許されなかったため、経済的に自立することなど不可能であり、夫や父といった男性の庇護の元にいるしかなかった。結局のところ、女性の地位は低く、彼らの支配を受けるのだとウルフは指摘するのである。

男女の対等な立場での共存という理想を実現させる為には、優越感に浸る為の比較対象としての存在から脱却し、女性が男性から精神的かつ経済的な自立を果たさなければならない、という主張は筋が通っているように思われる。しかし、現実はそのような理想からは程遠い。この事実を強調するため、ウルフは男女を明確に分けるのである。批判の対象が男性のみに絞られ、女性が被害者として仕立て上げるこの構図は『三ギニー』においてより深化し、怒りを伴ったものとなる。

「あなたがた」の戦争を阻止する「わたしたち」

『三ギニー』は、ウルフのエッセイの中でも反戦を訴えたものとして注目され、平和主義やフェミニズムと関連して取り上げられることも多い。ウルフはドイツやイタリアでファシズムが権力を握り、再び世界に戦争の色が濃くなりつつあった頃、このエッセイを執筆している。ここでウルフが提示するのは、「どうすれば戦争を阻止できるのか」という問題である。そのためには何が必要か、何ができるのかと熟考し、重要なのは女性の協力だと訴える。そして、女子学寮の発展、女性の就職支援団体、平和主義団体への寄付を決め、それぞれに 1 ギニーずつ、合計 3 ギニーになることから、題名には『三ギニー』という名がつけられている。

戦争を阻止する鍵として挙げられるのは、教育である。この教育は、まさに男女を分けるものであり、大学などで高等教育を受けられた「あなたがた」男性と、受けられなかった「わたしたち」女性という構図が示される。そして、この教育が授けたのは寛容や忍耐といったものではなく、独占欲や支配欲であるとし、それらを見事に習得した結果、戦争が起きたのだと語り手は主張するのである。したがって、戦争の責任が全て教育、つまり男性のものとされているのである。また、『三ギニー』では家父長制をはじめとした男性の支配が、執筆当時勢力を伸ばしつつあったファシズムとも結びつけられており、他人や他国をねじ伏せる様子を並列させて批判している。言い換えれば、これは理不尽に虐げられ攻撃される女性たちが、反ファシズム国家であると連想させることにもなる。「わたしたち」女性こそが正義であり、かつ平和の守護者であるといった理論が正当化されているのである。

戦争に関して男性を全否定する一方で、女性については仕方なく巻き込まれた被害者であるという立場をとる。しかし、競争や争いによって獲得されるものが、領土や権力ではなく結婚やそれに伴う安定した生活であると考えた時、女性も同様に闘争心を露わに競争し、闘うのではないだろうか。語り手は、“Consciously she must accept their [men’s] views, and fall in with their decrees because it was only so that she could wheel them into giving her the means to marry or marriage itself” (123)とし、女性が自分の利益の為に男性を利用していると認めているのである。結局のところ、他人を利用して自己の利益を追求しているのは、男女ともに同じなのだという人間の本质を突いたものとなっている。

未知なる貧困

では、この「わたしたち」という言葉にはどのような人間が含まれているのか。ここで再び貧困の問題に話を戻す。例えば『自分だけの部屋』でウルフは、女性が男性よりも貧しいと繰り返し主張しているが、これはあくまでも中産階級以上の女性たちが、「自立して生活する」には少ないという意味での貧困、自分の好きに使える財産を持ってないという貧しさである。そこに本当の貧困、つまりその日の食事すらままならないような飢えに苦しむ貧困層の人々は入っておらず、彼らの経済的な困窮を訴えているものではない。

ウルフは、女性への同情を集めるために貧困を利用している。『自分だけの部屋』を読み進めると、女性が貧しいから作家になれないとする理論の中に、貧しい人を無益な存在として位置づけ、芸術の創造すら不可能な者たちだとする主張が読み取れる。女性の財布が長きにわたり男性に管理され、精神的に虐げられてきたがために、女性芸術家の生まれる機会が失われてきたのだと憤るのである。女性擁護の主張へとすり替えられているものの、この根底に読み取れるのは、経済的に余裕のない人間に芸術の創造は不可能だとする考えである。このように女性を貧困と結びつけることで、女性を同情の対象としている一方で、本当に貧しい人々に対しては何の期待も抱いていない冷めた視線が見られる。

『自分だけの部屋』と同様に『三ギニー』においても、女性と貧困の問題を取り上げており、芸術に向ける経済的余裕や時間、情熱が足りないことから、優れた芸術家として世間に認知される女性がほとんどいないのだと主張している。つまり、貧しさが芸術の創造を阻むというのである。とはいえ、男性たちの暴走の結果である戦争を阻止するためには、女性の協力は欠かせない。なかでも、働く女性たちに協力を訴える必要があると語り手は述べるが、その中に貧乏人は含まれない。女性と貧困を結び付けておきながら、貧しい人に価値はないと否定し一蹴する姿勢には大きな矛盾を感じるが、女性擁護を大きく掲げることで、自分を含めた「わたしたち」上層中産階級の女性たちが社会に虐げられた不憫な存在であることを巧みに演出することに成功しているのである。

まとめ

ヴァージニア・ウルフは、男性優位な社会に一石を投じた作家として現在でも注目を集めるが、階級という観点からウルフを捉えたとき、そこにひとつの排他的な面が見出せるのではないかと彼女は歴とした「上層中産階級の女性」として生きること誇りに思っていたように思われるのである。言葉巧みに男女の社会的格差を貧富の差へと変換し、戦争の責任は全て男性に押し付けたうえで女性を被害者として位置づけ、繰り返し「女性の貧困」を訴え同情を誘うことに成功する。しかし、ここには初めから飢えや寒さに苦しむ実際の貧困者、男女ともに今日を生きる為に働き稼ぐしかない労働者のことなど含まれていないのである。

エッセイでは、女性が平和と結びつけられているが、「家庭の天使」や「良妻賢母」といったレッテルには抵抗を示しながらも、「女性だからこそ」平和に貢献出来ると考えていることには大きな矛盾を感じる。ここには女性であることを誇りに思い、自らの内にある欲や嫉妬などといった感情は棚に上げて、女性を美化する姿勢がうかがえる。平和問題を男女の社会的な性差に結び付け、上層中産階級以上の女性のひとりとして、「わたしたち」女性の地位向上を謳うウルフの一面が表出しているといえるのではないだろうか。

引用文献

Black, Naomi. *Virginia Woolf as Feminist*. Cornell UP, 2004.

Doan, Laura. *Fashioning Sapphism: The Origins of a Modern English Lesbian Culture*. Columbia UP, 2001.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Edited with an Introduction and Noted by Anna Snaith, Oxford, 2015.

秦邦生「ヴァージニア・ウルフと『誰もの生』—『波』におけるハイ・モダニズム、キャラクター、情動労働『終わらないフェミニズム—「働く」女たちの言葉と欲望』河野真太郎、麻生えりか、秦邦生、松永典子編、研究社、2016年、146-171頁。

松本朗「ミドルブラウ文化と女性知識人—『グッド・ハウスキーピング』、ウルフ、ホルトビー—『終わらないフェミニズム—「働く」女たちの言葉と欲望』、河野真太郎、麻生えりか、秦邦生、松永典子編、研究社、2016年、59-84頁。